

川端康成の少年少女小説 ― 倉木先生作品の比較から ―

小林 和江

はじめに

川端康成は新感覚派を代表する作家として知られる。新感覚派は「知的に再構成された感覚によって現実をとらえようとした」¹とされ、その表現には独特なものがある。『雪国』冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。」²や、『伊豆の踊子』の末尾「頭が澄んだ水になってしまつてゐて、それがぼろぼろ零れ、その後には何も残らないやうな甘い快さだつた。」³などがよく知られ、また比喩表現についても、解釈や外国語への翻訳の難しさを指摘されている。⁴

『雪国』は、雑誌発表の開始が昭和一〇年、単行本刊行が一二年で、第一節だけに限ってみても、先に挙げた冒頭部分以外に、

- ・ 悲しいほど美しい声であつた。高い響きのまま夜の雪から木魂して来さうだつた。⁵
- ・ なにか涼しく刺すやうな娘の美しさ
- ・ 弱い体力が弱いながらに甘い調和を漂はせてゐた。
- ・ 彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ、妖しく美しい夜光虫であつた。

など、独特と言うほかない表現を幾つもみることができる。だが、このような表現を、川端は同時期に刊行した初の少年少女小説集『級長の探偵』では使っていない。

収録作品は昭和四年から一一年の『少年倶楽部』『少女倶楽部』に発表したもので、ここでは、読者である小学校高学年から中学生の子どもたちが読みやすく想像しやすい表現によって、彼ら彼女らの日常が描かれている。一般向けの作品と子ども向けの作品で言葉の選び方、表現方法の違いがあるのは当然であろうが、川端独特の表現の変化や、子どものためを意識した工夫があるのではないだろうか。

川端には同じ題材をもとにして、一般雑誌と少年雑誌に発表した作品がある。中学の卒業年に恩師の葬儀を生徒たちの手で行ったという体験をもとにして、昭和二年には一般誌『キング』に「倉木先生の葬式」を、昭和二四年には少年誌『東光少年』⁷に「師の棺を肩に」を発表している。二作品の間には二〇年の隔たりはあるが、同一題材だからこそ、子どものために書いた場合の特徴が明確になると考える。

本稿ではこの二作品における表現の相違から、川端の少年少女小説に対する姿勢を考察する。

一 二作品とその背景

二作品の表現の違いについて検討する前に、作品の背景を確認する。

川端は明治四五年四月、大阪府立茨木中学校に入学、在学中に作家を志す。そして卒業を目前にした大正六年一月に恩師の死を経験する。先

生の名は倉崎仁一郎という。宮崎尚子「川端康成『生徒の肩に柩をのせて』について」では、川端が書いた生徒日誌や、同窓会である久敬会が臨時会報として没後一年に出した「故倉崎仁一郎先生追悼号」への寄稿文を用いて先生の人柄が示されている。倉崎先生は川端の入学時からの学年担当で、英語と歴史の授業を受け持ち、風紀委員でもあったため関わりが深かった。厳しさの中にも優しさがあり、生徒から慕われ、他の先生からの信頼も篤い人物であったという。

川端はこの恩師の葬儀が生徒の手によって執り行われたことを文章にし、それが家庭雑誌『団欒』（大正六年三月号）に掲載された。雑誌主宰者である石丸梧平は、「同校の生徒にして最近まで先生の慈しみの下にあった川端君の手に成ったもので、葬式前後の子弟の情誼が濃かに記されて居るから、特に乞ふてこれを採録する事にした」と冒頭に掲載の経緯を記している。川端がつけた題名は「葬式の日、通夜の印象」で、昭和二年の一六巻本『川端康成全集 第一巻』「あとがき」で掲載の経緯について述べ、「私の書いたものが雑誌に出たはじめ」¹⁰と記している。

作文が書かれた一〇年後の昭和二年、『キング』三月号（大日本雄弁会講談社）に掲載されたのが「倉木先生の葬式」という題名の小説で、倉崎先生から倉木先生へと先生の名前を変えて書いたものである。

この『キング』掲載作品を読んだ茨木中学校長からの依頼で、川端は久敬会『会報 第四八号』（昭和七年）に「師の柩を肩にした者」と題する文章を寄せた。ここでは『キング』への掲載の経緯は明らかにされていないものの、川端は「倉木先生の葬式」は「事実の美しさ」を書いたものと言っており、『キング』が求める「美談小説」として書きあげたことが確認できる¹¹。また、自分の作文が『団欒』に掲載された理由に

ついて、「一中学生の投書を麗々しく紹介してくれたのは、私の文章の美しさのためではなく、私達五年級の行の美しさが、石丸氏の感激させたゆゑであることはいふまでもない」と書いており、生徒葬の美しさによって文章が生まれ、それが『団欒』『キング』双方の評価に至ったと考えていたことがわかる。

川端はこの「ありがたい材料」で、さらに約二〇年後の昭和二十四年、『東光少年』六月号（東光出版社）に「師の柩を肩に」という小説を書いた。これについて川端は、昭和二十九年刊行の一六巻本『川端康成全集 第十六巻』の自作年譜で次のように記している。

大阪にゐた石丸梧平の雑誌「団欒」に「倉木先生の葬式」（英語教師、倉崎仁一郎先生のこと。）を投稿して掲載された。これは後に、昭和二年、「キング」に「倉木先生の葬式」として書き、また昭和二十四年、中学時代のノオトによつて、「東光少年」に「師の柩を肩に」として書いた¹³。

このように、川端は大正六年、一八歳の時に書いた作文が『団欒』に掲載されたのを始めとして、昭和二年、二八歳で「倉木先生の葬式」を『キング』に掲載、昭和七年、久敬会『会報』において『団欒』と『キング』掲載について語り、昭和三年、一六巻本『川端康成全集 第一巻』「あとがき」で『団欒』掲載の思い出をもう一度語る。そしてその翌年、五〇歳の時に『東光少年』に「師の柩を肩に」を掲載し、昭和二十九年刊行の一六巻本『川端康成全集 第十六巻』「自作年譜」で三回にわたるこの作品の掲載過程について述べていることになる。

この倉崎先生の死を題材にした作品についての先行研究には、先にあ

げた宮崎氏によるものの他に、小林芳人氏が「倉木先生の葬式」を「作者の少年時代の清々しい感動的な出来事を綴った作品であり、のちに彼の少年少女小説に多く描写される生き生きとした学校生活の原形が、ここにあると言えるのではないかと考察される。」と指摘しているものなどがある。¹⁵

二、表現の違い

では二作品の表現の違いについて考察する。以下、抜粋文の前に記した「倉」は「倉木先生の葬式」を、「師」は「師の棺を肩に」を示し、後の「」は各作品につけられた章の番号を示す。頁数は三五巻本『川端康成全集 第十九巻』（新潮社、一九八一年一月）による。¹⁶まずは冒頭の寄宿舎の朝の場面である。

倉 兎狩りがあつて間もなくの朝だつたから、一月の中頃だつた。昨夜硝子窓に凍りついた寒気が朝日で滴になつてゐたし、枯れた芝生には霜柱が立つてゐた。〔一・三九三頁〕

師 「わあッ、えらい霜だ。」（中略）／芝生は校舎のかげになつてゐて、端のはうだけ朝日が染めてゐる。日がのぼるにつれて、その日のあたる部分が広くなるから、芝生は朝の日時計の役をする。／その芝生に、今朝は霜柱がひどい。〔一・四一一頁〕

自然が起こした現象を描いて、いつもと変わらない日常から恩師の死を告げられるという非日常へと続いていく、物語の導入部分にあたる。

「倉木先生の葬式」における「昨夜硝子窓に凍りついた寒気」は今日に見えるわけではないため、結露の知識と想像力を必要とする表現になっている。それが「師の棺を肩に」では消え、寄宿舎の部屋の窓越しに見える今の景色を描いて寒さを表現している。また会話を入れることで、より臨場感も増している。

続いての違いは、舎監室に向かう場面である。

倉 足首のあたりに厳しい朝寒を感じながら、私達は舎監室の扉を開いた。〔一・三九三頁〕

師 朝の廊下はつめたかつた。〔一・四一二頁〕

「師の棺を肩に」では「朝寒を感じる」という季語を用いた表現が消え、兎狩りで山を駆けまわって足が痛く、その痛い足に「朝の廊下はつめたかつた。」とだけになっている。そして舎監室に入り、宮田先生との会話場面に移る。

倉 活き活きと紅い頬をして太った宮田先生が泣かれるなどとは、想像も出来ないことであつた。しかし、それが当然のことのやうな気持だつた。私達にも先生の悲しみが分るやうな気持だつた。そんな風な倉木先生の死だつた。〔一・三九四頁〕

師 ゴム人形のやうにふとつて、明るく赤い頬の宮田先生が泣くなんて、ふだんは想像もできなかった。／その宮田先生さへ泣いてゐられたといふことで、私たちは倉木先生の死がどんなに悲しいかをはつきり知らされるやうだつた。〔一・四一三―四一四頁〕

どちらも宮田先生の悲しみへの共感を示しているが、「倉木先生の葬式」では「当然のことのやうな気持」「悲しみが分るやうな気持」「そんな風な倉木先生の死」という間接的な表現で読者に想像する余地を残す。「師の棺を肩に」ではそれが「私たちは倉木先生の死がどんなに悲しいかをはつきり知らされるやうだつた。」と、より直接的な表現になっている。

宮田先生との場面が終わると、倉木先生の思い出を挟んで、先生の小さいお嬢さんについて語られる。

倉 また私には、先生の小さいお嬢さんの悲しみが第一に想像されて、痛ましい気がした。〔一〕

師 ——あの小さいお嬢さんは、どんなに悲しいだらう。／と、私は思つた。〔二〕

ここでも、「想像されて」と相手の気持ちに寄り添つたうえで自分も「痛ましい」と感じるという、やや複雑な表現が使われていたのが、「どんなに悲しいだらう。と私は思つた」と直接的な表現になった。加えて「師の棺を肩に」では、この続きに小さいお嬢さんとの出会いを思ひ出す場面があり、兄、姉の話が入る。倉木家の子どものたちの状況や、小さいお嬢さんの様子が具体的に語られており、お嬢さんの悲しみへの共感がしやすい。

次に、倉木先生の死を聞いてからの授業で、山田先生（「師の棺を肩に」では国語の水島先生）が「ある時はありのすさびにつらかりきなくてぞ今は人の恋しき」¹⁷と黒板に古歌を書く場面がある。

倉 その歌が私達の胸にひしひしと実感として迫つて来た。〔二・四〇一頁〕

師 唇のあたりを動かしながら、だまつてゐられた。〔四・四二三頁〕

古歌をふるへる手で書いて、まただまつてゐられた。〔四・四二三頁〕

古歌から受ける感情は、悲しさや懐かしさ、寂しさといった複雑なものである。それを「ひしひしと実感として」受け取るためにはある程度の知識が必要となる。子どもがこの古歌を理解したうえで「ひしひしと実感として」受け取るのは難しいと考えられる。「師の棺を肩に」ではこの「実感」を読者に想像させることは避け、先生の唇が動いていながらも黙っている様子、手が震えている様子と、見たまを説明するように変化させている。同様の場面はまだある。

倉 縁側を下りると、もう一度先生の家のたたずまひを見返つた。何となく陰気な粗末な家だつた。きつと胸がつまる感じだつた。

〔三・四〇四頁〕

師 杉垣のなかに、そまつな倉木先生の家があつた。〔六・四三〇頁〕

「粗末な家」の存在だけでなく、「何となく陰気」「きつと胸がつまる感じだつた」という言葉で、人が亡くなった家の暗さや影を、一層濃く感じている私の心情を語っていたのが、ここでも見た目の様子だけになっている。また次の違いも同様の意図によるものであろう。

倉 下腹が豊かに突出た、立派な体格だった。洋服のどこかに、煙草の灰が、白い埃が着いてゐるやうな無頓着な風采だったが、それが田舎の中学教師として古びてしまった侘しさと、生活の貧しさとかを現してゐるのでなく、ゆつたりとした慈愛を現してゐた。

〔一・三九五頁〕

師 倉木先生は洋服のどこかに、いつも煙草の灰がついてゐるやうな無頓着さだった。洋服も私たちが五年間見なれたものだ。／＼かし、下腹がゆつたりでた、立派なからだで、田舎教師のわびしさとか、生活のつかれとかは少しも見えなかつた。〔二・四一五頁〕

ここでは倉木先生の風貌が描かれているが、「倉木先生の葬式」にある「ゆつたりとした慈愛を現してゐた。」という表現が「師の棺を肩」では消えている。

「ゆつたりとした慈愛」は、『雪国』に見られた「悲しいほど美しい声」「涼しく刺すやうな娘の美しさ」「甘い調和」といった表現に類似した、川端独特の表現である。前述の大嶋眞紀氏は『雪国』の比喩表現について、自然情景と感覚の表現に関わる比喩を考察し、特に感覚の表現に関わる比喩において川端は共感覚比喩を多く使うことを指摘している。¹⁸ 共感覚とは「一つの物理的刺激に対して、本来それに相応して起こるべき感覚以外に起こる感覚」¹⁹とされ、大嶋氏は『雪国』の「澄み上つて悲しいほど美しい声だった。」を視覚と聴覚、「なにか涼しく刺すやうな娘の美しさ」を触覚と視覚をあわせた例としてあげている。²⁰ 「ゆつたりとした慈愛」は比喩表現ではなく、共感覚表現でもないが、本来形のない「慈愛」という観念を「ゆつたりとした」という擬態語で修飾し

ており、やはり川端独特の表現である。

同時に「古びてしまった侘しさ」という表現もなくなっている。「古びてしまった」には先生が長く着ている服の様子だけでなく、勤続年数の長い先生の状況も重ねられ、それを受けての「侘しさ」である。「田舎教師のわびしさ」と変わることで、「古びてしまった」というものの悲しさは消された。年齢を重ねたことによる「侘しさ」は子どもには想像しにくいものだろう。

他にも、五年生の級会の場面では、

倉 「先生の葬列は我々で作らう。棺も担げ。提灯とか花とか、そんな者も皆が運ぼう。百人の五年級が揃つて葬式に労力奉仕をすれば、他の者の指一本借りなくてもいいのだ。学校のために、また僕達のために一生を捧げられた先生の最後を清らかにすることが出来るのだ。」〔二・四〇三頁〕

師 「先生に縁もゆかりもない、葬式人夫なんか棺をかつがせるのは、僕たちの恥だよ。岡島君はいいところに気がついてくれた。」
「さうだ。先生の葬式の労力は、全部僕たちが奉仕しよう。ほかの人の指一本借りないでやらう。」〔五・四二九頁〕

と、先生の棺を担ごうという生徒の言葉の終わりにある「先生の最後を清らかにすることが出来るのだ。」が消え、また先生の言葉を挟んだ後の一文も、

倉 五年級会は美しい高らかな興奮のうちに終つた。〔二・四〇三頁〕

師と、松本先生は約束した。〔五・四二九頁〕

と違っている。「先生の最期を清らかにする」についてはそれほど特別な表現とは思われないが、「美しい高らかな興奮」は明らかに共感覚的な表現である。これらが「師の棺を肩に」で消されているのは、やはり、子どもたちに伝わりにくいものであることが最大の理由であろう。

「美しい」「清らか」という言葉は、それらの使用そのものが減少している。葬列の様子を描いた場面をみていくと、まず「倉木先生の葬式」では次のようになっている。

その翌日の午後、世にも不思議な、そして世にも美しい葬列が田舎町を通って行った。

柩は二三十人の制服の中学生の肩にあつた。柩は故人の教へ子の中に埋れてゐると云つてよかつた。私は青竹の柄の白提燈を持つて、先頭の僧侶の後につづいた。私の周りには、矢張り提燈や花環や供花を持つた級友が静かに歩いてゐた。白木の位牌を持つた喪主が、私の直ぐ後に続いて、それから柩だった。柩の後には教師と全校の学生とが長蛇の列を作つた。軒並に見物人が立ち並んでゐた。女達は泣いてゐる者もあつた。私達の葬列がこの町を清らかな悲しみで染めてゐるやうであつた。〔三・四〇五頁〕

中学生による「世にも不思議な、そして世にも美しい葬列」が通り、その葬列が「この町を清らかな悲しみで染めてゐるやう」な情景。美しさと清らかさが強調された描かれ方といえよう。

一方の「師の棺を肩に」では、

葬式の日も冬曇りだった。

行列の通る町通の人々は、みな軒下にてて、心から礼をした。倉木先生の質素な棺は、一三十人の中学生の肩の上にあつた。またそのまはりを、途中で交替する三四十人が、取り巻いてた。先生の棺はまったく教へ子に守られてゐた。

棺の前を進む、旗、提燈、花、花環なども、すべて教へ子が持つてゐた。

私は青竹の柄の長い、白提燈を持つて歩いた。

私のうしろには、倉木先生の子息が、白木の位牌をささげて続いた。

四年級から下の、全校の生徒は、寺の入口にらんで待つてゐた。私たちの行列が静かに近づく、下級生たちのすすり泣きが聞えた。

式場の係りも五年生がつとめた。〔七・四三二頁〕――

と、「美しい」「清らか」といった言葉は消え、改行を重ねることによって、目の前を通る葬列を実況するかのような表現になっている。全体的に改行が多い「師の棺を肩に」であるが、この葬列の場面は改行による効果がよく表れている。「質素な棺」「倉木先生の子息」「四年級から下の」「下級生たちのすすり泣き」と、目に見えるもの、耳に聞こえるものが詳細に書かれた上での改行で、余白が生まれ、想像を広げる時間が読者に与えられ、その場に立ち会っているような場面になった。

以上のように、「倉木先生の葬式」では間接的な表現や共感覚的表現など、子どもには伝わりにくい表現が多く用いられている。「えもいわ

れぬ」「もののあはれ」といった言葉を思い浮かばせるような表現を多用することで、作品全体が抒情的になり、美しいものになっている。一方の「師の棺を肩に」では、より直接的な表現が用いられ、複雑な感情を複雑な表現で伝えることは避けて、目に見えることを見たまに描写するなど、子どもに伝わりやすい表現が取られている。「倉木先生の葬式」にもみられる共感覚的表現は、『雪国』に多くみえるように川端らしい表現である。川端は「子供の読物」ではそれをあえて消して、わかりやすさを重視したと考えられる。

もっとも、ただひとつ、共感覚的表現が残ったところがある。二作品の最後の場面である。

倉 そこから、授業を受けるべく学校へ向った野道の朝寒の、何と清らかなことであつたらう。みんなが、一輪づつの清らかな白い花を持って――。〔三・四〇七頁〕

師 私たちは九時の授業におくれないやうに学校へ向かつた。野道の朝寒が清らかにしみた。／みんなが一輪づつの白い花を持っていた。〔七・四三五頁〕

「朝寒」の「清らか」さが、身に「しみ」るものとして残された。「師の棺を肩に」の中で、最も川端らしさを感じさせる表現である。

三、少年少女小説としての「師の棺を肩に」

次に、「師の棺を肩に」でみられる大幅な加筆や変更から、少年雑誌

への掲載作品とするためにどう変わっているのかを考察する。

「倉木先生の葬式」の分量は四百字詰め原稿用紙約三〇枚、章の数は三である。それが「師の棺を肩に」では、分量は原稿用紙約五〇枚に増え、章の数は七となった。登場人物も、若干の変名とともに、先生・生徒が増えている。

まず加筆部分である。三章の校長の話、四章の四時間目の松本先生の話、六章の寄宿舎の校長の話は、倉木先生の人物像を語るために大幅に書き加えられたところである。

三章の校長の話を比較してみると、「倉木先生の葬式」では「小柄の校長の声は、涙に曇つてよく聞取れなかつた。とにかく、倉木先生はこれまでも度々高等学校などから招聘されて、栄達の機会は幾らもあつたに拘らず、名利を離れて、一田舎中学のために献身された一生を偲べれた物語だつた。」〔二・三九九頁〕とあるだけで、内容は具体的に書かれていない。対して「師の棺を肩に」では次のようになっている。

小柄の校長の声は、涙にくもつてよく聞き取れなかつた。

「倉木先生が一番古くからの、ほとんど本校創立以来の先生であることは、諸君もよく知つてゐる。倉木先生は、この私の杖だつたし、この学校の柱だつた。私はこの学校の仕事を倉木先生の肩にかついでもらつてきた。学校のごたごたも、倉木先生の考へでさばかれることが多かつた。教員のあひだの感情のもつれも、倉木先生の広い胸のなかで、とけていくことが多かつた。倉木先生のかういふ徳と力とは、生徒にもおぼろげながらわかつてゐただらうから、倉木先生のなくなつたことを、諸君も強く悲しむものだと思ふ。」

こんな意味の言葉が、校長の低い声でつぶけられた。

「倉木先生は一身の名利を離れて、この中学のために、一生をささげつくした人だった。倉木先生が二十年あまりも勤務したのは、ほかにいきどころがなくて、しかたなしに動かなかつたのではない。倉木先生の学問は、田舎中学にうづもれさせておくには、もつたないものだつた。上の学校の教師として、たびたび招かれた。出世の機会はいくらもあつた。しかし、倉木先生はこの学校にたいする愛情と、この私にたいする友情とで、この町で死んでくれた。」

〔四一九―四二〇頁〕

次に大幅に増えているのは四章の松本先生（「倉木先生の葬式」では松木先生）の言葉である。「倉木先生の葬式」二章では「松木先生の挨拶に次いで、甲組の級長が立上つた。」（四〇二頁）とあるだけで先生の話の内容は書かれていない。一方「師の棺を肩に」では、教育のことを第一に考え、休みの日でも生徒を気にかける先生であつたこと、他の先生が議論を切りあげ、及第か落第か決めようとしても、軽々しく扱える問題ではないと会議を続けたことなど、倉木先生が生徒のためなら他の先生に意見をする熱心な人物だつたことを、例をあげて語っている。さらに、六章に大幅な追加部分がある。葬式の前夜、寄宿舎で皆が集まる場で、校長が「当直の舎監」として登場し生徒たちに話をする。「倉木先生の葬式」にはない場面である。この部分には、朝の校長の話と重複するところがある。しかし、朝学校で皆に話し、夜、寄宿舎でまた自分と倉木先生の思い出話を繰り返すことで、倉木先生への校長の信頼をより強く印象付ける結果になっている。

六時間目の体操が五年級会に変わったという場面には違いがある。倉木先生の逝去について話し合う級会で、「倉木先生の葬式」二章では松

木先生の挨拶に次いで級長が自発的に何かをしたいと語り、別の生徒が先生の遺骸にお別れしたいと発言する。それが「師の棺を肩に」五章では、級長に続いて他の生徒が卒業後のことも考えておこうと提案する。複数の生徒の手が上がり、さまざまな意見が出される。生徒同士のやり取りで会話が続き、読者もその場に参加しているかのような臨場感のある場面となっている。

同じことは五章の岡島という不良少年が先生の柩を担ごうと言い出す場面でもみられる。前節でも取り上げた「先生の最期を清らかにする」という言葉がある場面で、「倉木先生の葬式」では岡島の発言に、他の生徒一人が呼応して皆に「先生の葬列は我々で作らう」（四〇三頁）と呼びかけるのだが、「師の棺を肩に」では岡島と他の生徒複数人が会話のやり取りをすることで場面が展開されている。生徒たちが口々に意見を言っている様子が描かれており情景が想像しやすい。

ほかにも読者が小中学生であることで変えたと考えられる場面がある。「倉木先生の葬式」での「柩は故人の教え子の中に埋もれていると云つてよかつた」（三・四〇五頁）は、「師の棺を肩に」では「先生の棺はまつたく教へ子に守られてゐた。」（七・四三二頁）となっている。

「埋もれてゐると云つてよかつた」では、他人事のような距離のある語り方だが、「守られてゐた」となることで、生徒たちが守っていることが言葉で示され、生徒主体となつて葬列ができ上がり、先生を送り出そうとしている情景がよく伝わってくる。

この葬列の場面はそれぞれのタイトル「倉木先生の葬式」、「師の棺を肩に」を最もよく表す場面といえよう。「倉木先生の葬式」では、葬列の傍で見ているような、客観的な見方で葬列の様子を描いているが、「師の棺を肩に」とすることで、「師の棺」を生徒たちの肩にのせ、先

生が「守られて」運ばれていく様子が伝わってくる。こちらの方が生徒の主体性が伝わってくるようだ。変更された箇所はほかにもある。倉木先生が兎狩りから帰った土曜日、倉木先生の子どものなかで師範学校に通う姉がちょうど家に帰っており、先生の具合が悪いために寄宿舎に帰るのを渋る場面である。倉木先生が、「教師の娘がそれでは困る。²¹親がちよつと寝つけば、学校を休んでもいいと生徒に教へるやうなことになつては申訳ない。」〔三九六頁〕と話した後で、

倉 と、いつもの通りな厳格な父だったさうだ。〔一・三九六頁〕
 師 と、いつもの通りに、教師としての立場を、きびしく守られたのださうだ。〔二・四一七頁〕

と、倉木先生の立場が「父」から「教師」へと変わっている。一般誌では読者の大人たちに対して「父」倉木先生から娘に対する父親像としたが、少年誌では教師としての立場を守る教師像となった。学校を舞台とした物語を読んでいる小中学生には、父親像という余計な情報を入れない方が教師と生徒の物語として理解しやすい。

なお、二つの作品の間には、倉木先生の家族構成にも違いがある。「倉木先生の葬式」では「奥さんに早く死別れた先生の臨終に：」（一・三九六頁）と、先生の奥さんは亡くなっているが、「師の棺を肩に」では生きている。宮崎尚子氏の調査によると、実際の倉崎先生の妻はこの時には亡くなっていない。これについて宮崎氏は「先生の死と同時に兄姉はいるものの、この「幼いお嬢さん」は孤児になってしまう。この孤児性を際立たせる為に、敢えて先立たれたという設定にしたと思われる。しかし「師の棺を肩に」では本来の設定に戻している。ここで

孤児性にこだわらずに、生徒たちに焦点を当てることにより彼らの青春を普遍化したのではないか。」²²と述べており、この宮崎氏の指摘に筆者も同意する。

また、次のような削除もある。

倉木先生の思い出として、先生の鉄縁の近眼鏡、肌の感じ、太っていたことなどは共通して描かれているが、次の回想は「師の棺を肩に」ではなくなっている。

倉 本棚から英作文の筆記帳を出してみた。赤鉛筆で添削して下さった先生の文字があつた。ところどころに、very good. と女性的な美しい文字があつた。先生は黒板に向はれた時でも、白墨を傾けて体に似合はない優しい字を丁寧に書かれるのだつた。〔一・三九六—三九七頁〕

「女性的な美しい文字」という倉木先生の文字への印象が語られ、「女性的」という言葉に優しさを感じさせようとしている。つまり倉木先生の優しさを筆記帳の文字を通して感じさせている。優しい人柄だったことを文字の思い出から伝えるこの間接的な方法は、「師の棺を肩に」では採られず削除されている。

以上のように、「倉木先生の葬式」に比べて、「師の棺を肩に」は、回想や会話が増えることで、より再現性が高く臨場感のある作品となっている。これにより、倉木先生がいかに学校にとって大切な人物であったか、校長をはじめとする他の教師たちからの信頼も厚く、生徒のことを第一に考える教師であつたかがよく伝わってくる。詳細に先生の思い出を語る場面が「師の棺を肩に」で増えたことは、「中学時代のノート

によつて、『東光少年』に『師の柩を肩に』として書いた」という川端の言葉を裏付けるようである。また意見する生徒の人数を増やし、会話を分担させることで、生き生きとした学生生活を目に浮かばせる結果となり、少年を読者対象とした雑誌にふさわしい内容となっている。

おわりに

「倉木先生の葬式」は、『キング』掲載時に「学窓ロマンス」と題名に添えられているように、美しい表現によつて、まさに「ロマンス」という言葉が似合う作品になっていた。生徒の恩師への思いを美しく讃える表現は、学生時代を懐かしむ大人にとって好ましいものだっただろう。一方、『東光少年』の「師の棺を肩に」には、「五年級までであった旧制中学でのこと」というサブタイトルがつけられている。昔の学校の様子や生徒たちの立派な行いを伝える作品として、昭和二十四年当時の児童たちへの道徳的な教材としての側面もあつたと考えられる。

二作品は、ともに生徒の恩師を慕う気持ちを伝えるというテーマでは共通している。そしてそれが、それぞれの読者に伝わるものになっている。発表時期には約二〇年の差があるが、表現の違いは川端の書きぶりの変化だけによるものではない。「倉木先生の葬式」にあつて「師の棺を肩に」にはみられない表現は、「倉木先生の葬式」とほぼ同時期に書かれた『級長の探偵』収録作品にもみられないからだ。生徒の会話や行動をそのまま写し取ったような描き方、伝わりやすい言葉で子どもの日常を描くことは、例えば『級長の探偵』に収録された「開校記念日」において、音楽の時間の先生との会話や主人公が友だちと学校から帰る様

子など、小学生の日常や学校生活をそのまま写し取ったように描いていることと共通している。そしてどの収録作品にも、『雪国』や「倉木先生の葬式」にあるような川端独特の表現は使われていない。昭和の初めから一貫した向き合い方が認められ、川端にとつての少年少女小説への姿勢を伺うことができる。

注

1 秋山虔、三好行雄編著『原色シグマ 新日本文学史』（二〇〇〇年一月、文英堂、一七五頁）。ほか、「既成リアリズムに反発し、文学の形式を一新することを企図して、斬新な感覚的表現におもむ」いている（磯貝英夫『資料集成 日本近代文学史』右文書院、一九六八年一〇月、二六三頁）などと説明される。

2 『全集 十巻』九頁。この後の抜粋も同巻一二〜一四頁による。なお、昭和一〇年の雑誌掲載時には「国境の」ではじまる一文は冒頭ではなく、文章にも「国境のトンネルを抜けると、窓の外の夜の底が白くなつた。」（『全集 二十四巻』七四頁）と若干の違いがある。

3 『全集 二巻』三二四頁。

4 川端の『雪国』の比喩表現の研究として、大嶋眞紀「川端康成『雪国』の比喩表現―外国人留學生の視点より」（『表現研究 五七』一九九三年三月、一〇―一七頁）、同「川端康成〈掌の小説〉の英訳をめぐって―比喩を中心に」日本英語表現学会編『英語表現研究

English usage and style 一〇』（一九九三年一〇月、二八―三五頁）、「シンポジウム川端康成『雪国』の表現をめぐって」（パネリスト…川端香男里、小森陽一、中山眞彦、蘆田孝昭、原子朗、司会…十重田裕一、中村明、一九九九年六月一日、会場…カリタス女子短

期大学、収録『文体論研究 Studies in stylistics 四六』日本文体論学会、二〇〇〇年三月）などがあげられる。

5 注2と同じくこの文章は単行本発表のものである。雑誌掲載時は「悲しいほど美しい声であつた。高い響きのまま雪から木魂して来さうだつた。」（『全集 二十四巻』一〇—一四頁）となっており、「夜の」がなかった。

6 日本児童文学学会編『児童文学事典』（東京書籍、一九八八年四月）の「少年倶楽部」（三八二頁）には、小学校四、五年から中学生を対象としており、「少女倶楽部」（三七九頁）も「少年倶楽部」と同年齢の少女を対象としている。本論で使用する「子ども」は、読者対象である小中学生を示すものとする。

7 『東光少年』第一号には、作家吉川英治による「日本の少年緒読者へ贈る」と題したメッセージがあり、雑誌最終頁には「東光少年だより」に「全国の少年諸君お元気ですか？」という呼びかけから始まる文章が掲載されている。この「少年」が具体的に何歳、何年生を示しているかは明確な表記はない。しかし表紙や内容から『少年倶楽部』と同じぐらいの読者層を対象にしていると考えられる。（『東光少年』東光出版社、一九四八年一月 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/10998153> 一〇二四年九月一六日閲覧）

8 宮崎尚子「川端康成『生徒の肩に柩をのせて』について」（『川端文学への視界 川端文学研究二〇一二 機関誌年報No.27』、二〇一二年六月、一四一—一四九頁）には、『団欒』掲載文翻刻があり、その解説がある。倉崎先生が島根県松江市の生まれであることや、中学に招かれるまでの職歴がわかる。また先生が脳溢血で倒れる十日前から夫人が風邪をひいていたことや、長男は東京の通信管理練習所に在

学していたこと、長女は岩手県に嫁ぎ、次女は大阪女子師範学校の予科に通っていたことなど、家族についての記述もあり、「倉木先生の葬式」や「師の棺を肩に」と実際の差異がわかる。

9 注8前掲『団欒』翻刻（一二四頁）。

10 一六巻本『川端康成全集 第一巻』「あとがき」（新潮社、一九四八年五月、三九二頁）。ここで川端は石丸が題名を「師の柩を肩に」とつけてくれたと記憶していたが、注8前掲論文で「生徒の肩に柩を載せて」（宮崎氏は「載せて」は「載せて」の誤植として論文では「のせて」を使用）は石丸がつけた題名であり、川端の文章は「葬式の日、通夜の印象」という題名だったことが明らかにされた。

11 久敬会『会報 第四八号』（一九三三年二月）。まずこの川端の文章については郡恵一氏による発表があつた（『川端文学への視界』川端文学研究一九八七 機関誌年報No.3 一九八七年一月、一六五—一六九頁）。本文中の引用は、宮崎尚子「川端康成に影響を与えた茨木中学校の教師たち」（『茨城大学教育学部紀要 六八号』二〇一九年一月、一—一〇頁）の「会報 久敬会 昭和七年二月の別紙紹介翻刻」による。川端の文章は会報締め切りに間に合わず、別紙差し込みになったという。この中でも川端は「生徒の肩に柩をのせて」を「師の棺を肩にして」と記しており、題名を覚え違いしていることが宮崎氏により指摘されている。

12 注11前掲『会報』翻刻（八—九頁）。

13 引用は「年譜」（一六巻本『川端康成全集 第十六巻』三八七頁）による。『全集 十九巻』の「解題」（七二四頁）では、「倉木先生の葬式」と「師の棺を肩に」を比較すると、「かなりの逕庭が見出されるのは、「倉木先生の葬式」を基にして改稿したのではなく、改

めて少年時のノオトから原稿が作られたためである。」と記載されている。残念ながら「中学時代のノオト」は全集に収録されておらず、ノオトから原稿への経緯は確認できない。

¹⁴ 注8前掲論文で宮崎氏は『団欒』掲載の「生徒の肩に柩をのせて」

「倉木先生の葬式」「師の棺を肩に」の三作品を比較し、「倉木先生の葬式」で倉崎先生を「倉木先生」とした理由を、「架空の名にすることで普遍的なこととして定着しようとしたと思われる。」（一四八頁）と指摘する。また「生徒の肩に柩をのせて」についても、「追悼という側面を持ちながらも、立派に作品として評価できるものであるといえる。」（一四九頁）としており、三つとも作品として評価している。本論では川端がつけた題名が「印象」となっていることから作文と考え、「倉木先生の葬式」「師の棺を肩に」を比較対象とする。宮崎氏にはほかに「大阪府立茨木中学校における五箇年の教育の実態——生徒の肩に柩をのせて」と「十六歳の日記」への影響を中心に（『川端文学の視界 川端康成研究二〇一三 機関誌年報No.二八』、二〇一三年六月、八四—一〇一頁）、「川端康成と藤波大超」大阪府立茨木中学校の生徒葬」（『尚綱語文』二〇一七年六号、三一—三八頁）などがある。

¹⁵ 小林芳人「川端康成の児童文学」（『美と仏教と児童文学と——川端康成の世界』双文社出版、一九八五年十二月、二九一頁）。他には羽鳥徹哉、原善 編『川端康成全作品研究辞典』（一九九八年六月、勉強出版）の「師の棺を肩に」（一八二頁）に、「倉木先生の葬式」と比較して「倉崎仁一郎先生の死を随想風に綴った。分量、新感覚的表現、父子家庭など大きく改稿。」「少年時のノオトに忠実か。先生に対する尊敬と思慕がみずみずしい感性によって表われ、少年時代の蘆

花や独歩への憧れを彷彿させる。」との指摘がある。

¹⁶ 『全集 十九巻』の「倉木先生の葬式」「師の棺を肩に」の解題（七二三—七二四頁）によると、二作品とも発表誌によって全集本文を作成したとあり、「師の棺を肩に」の方で四箇所の変更がみられるが、表現や内容に関するものではない。

¹⁷ 本文引用は「倉木先生の葬式」からで「師の棺を肩に」では上の句と下の句の間に「、」が入る。この歌は『源氏物語』の注釈書である藤原定家『奥入』の「ある時はありのすさびに憎かりき無くてぞ人の恋しかりける」（山岸徳平 校注『源氏物語 一』日本古典文学大系 一四、岩波書店、一九五八年一月、三三頁）に類似している。

¹⁸ 大嶋真紀「川端康成『雪国』の比喩表現——外国人留学生の視点より」（注4前掲）。

¹⁹ 日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第四巻』（小学館、二〇〇一年四月、四一二頁）。

²⁰ 大嶋真紀「川端康成『雪国』の比喩表現——外国人留学生の視点より」（注4前掲、一四頁）。

²¹ どちらも同じ内容で、本文引用は「倉木先生の葬式」からである。「師の棺を肩に」では、「教師の娘がそれでは困る。親がちよと寝ついたら、学校を休んでもいいと、生徒に教へるやうなことになつては、申しわけがない。」（四一七頁）とある。

²² 注8前掲、一四八頁。

※本稿での『全集』は三五巻本（補巻二巻）『川端康成全集』（新潮社、一九八〇年〜八四年）を指す。参考文献を含め、引用に際して漢字は新字に改め、ルビは省略している。